

膜陥入 8 例、胸膜陥凹 23 例、胸膜浸潤 32 例、胸壁浸潤 10 例、リンパ節腫脹 17 例に認めた。造影不良域は 0-25% 5 例、26-50% 4 例、51-75% 11 例、76-100% 11 例であった。

手術日からの無再発生存期間は平均 937 日 (11-3,196 日)、全生存期間は平均 1,020 日 (24-3,367 日) であった。

P1-5.

口腔扁平上皮癌におけるマクロファージ発現様式の臨床病理学的検討

(口腔外科学)

○河野 通秀、里見 貴史、長谷川 温
 虻川 東嗣、渡辺 正人、古賀 陽子
 近津 大地

【目的】 一般的にマクロファージは、炎症応答ネットワークのなかで免疫を活性化する M1 型と抑制する M2 型の二極に分化することが知られている。近年、腫瘍微小環境内で M2 マクロファージが癌細胞の遊走・増殖などの、腫瘍の進展に深く関与する腫瘍関連マクロファージとして注目されている。本研究の目的は、口腔扁平上皮癌におけるマクロファージの発現様式を検討し、マクロファージの発現と臨床病理学的因子との関連および予後について明らかにすることである。

【対象および方法】 対象は 2000 年から 2005 年までに東京医科大学病院口腔外科で扁平上皮癌と診断され、切除手術をうけた 60 例を対象とした。方法は、手術切除検体に CD68 と CD163 の免疫組織化学染色を施し、腫瘍浸潤部および腫瘍実質内のホットスポット 3 視野の任意単位面積あたりの発現個数、CD163/CD68 を臨床病理学的因子 (年齢、性別、T 分類、リンパ節転移、部位、組織分化度) との関連性、予後について検討した。

【結果】 患者背景は、平均年齢は 61.8 歳 (29-94)、男性/女性 (38/22)、原発部位別は、舌: 36 例、下顎歯肉: 8 例、上顎歯肉: 5 例、頬粘膜: 5、口底: 4、口蓋: 1、下唇: 1、T 分類は、T1: 8、T2: 32、T3: 4、T4: 16、N 分類は N0: 37、N1: 1、N2a: 2、N2b: 8、N2c: 2、N3: 0 であった。

臨床病理学的因子との検討では、腫瘍浸潤部での CD163 陽性マクロファージ発現は T 分類の進行例

リンパ節転移例で有意に高値を示し、関連性を認めた。また、腫瘍内 CD163 陽性マクロファージ発現は、リンパ節転移群で有意に高値であった。疾患特異的 5 年生存率の検討では、CD163 陽性マクロファージ高発現群が有意に予後不良であった。

【結論】 口腔扁平上皮癌における CD163 陽性マクロファージ (M2 マクロファージ) の高発現は、リンパ節転移と局所進行に関連し、予後不良因子であることが示唆された。

P1-6.

アルツハイマー病患者のフレイルに関連した酸化ストレスと炎症

(社会人大学院博士課程 4 年高齢総合医学)

○波岡那由太
 (高齢総合医学)

廣瀬 大輔、畑中 啓邦、深澤 雷太
 佐藤 友彦、清水聡一郎、櫻井 博文
 羽生 春夫

【目的】 高齢認知症患者では身体的フレイルを合併しやすくなるが、アルツハイマー病 (AD) との病態学的関連については不明な点が多い。本研究では AD 患者におけるフレイルの有症率について調査し、酸化ストレスや炎症との関連について検討した。

【方法】 外来通院中の 133 例の軽度から中等度の独歩可能な AD 患者を対象とした。体重減少、疲労感、身体的不活発、筋力低下、歩行速度のうち 3 項目以上満たす場合をフレイル、1~2 項目の場合にプレフレイル、1 項目も満たさない場合をフレイルなしと判定した。酸化ストレスの評価には、活性酸素自動分析装置 (FRAS4) を用い、血中の酸化ストレス値 (dROM) と抗酸化力 (BAP) 及び尿中の 8-OHdG と 8-isoprostane を測定し、炎症マーカーの評価には血中の IL-6 と TNF- α を測定した。

【結果】 133 例のうち 43 例 (32%) がフレイルなし、57 例 (43%) がプレフレイル、33 例 (25%) がフレイルと判定された。フレイル患者はより高齢で、女性に多く、併存疾患がより多くみられた。フレイルまたはプレフレイル群はフレイルなし群と比較して、血中 dROM 値が有意に高く、BAP 値が有意に低く、尿中 8-OHdG や 8-isoprostane が有意に高かった。また、血中 IL-6 もフレイル群でフレイルなし